

# OISCA

Cultivate the Future 一大地と人に、もっとドラマを—

## 特集

オイスカ創立60周年記念鼎談

## 地球規模の思想をつくる

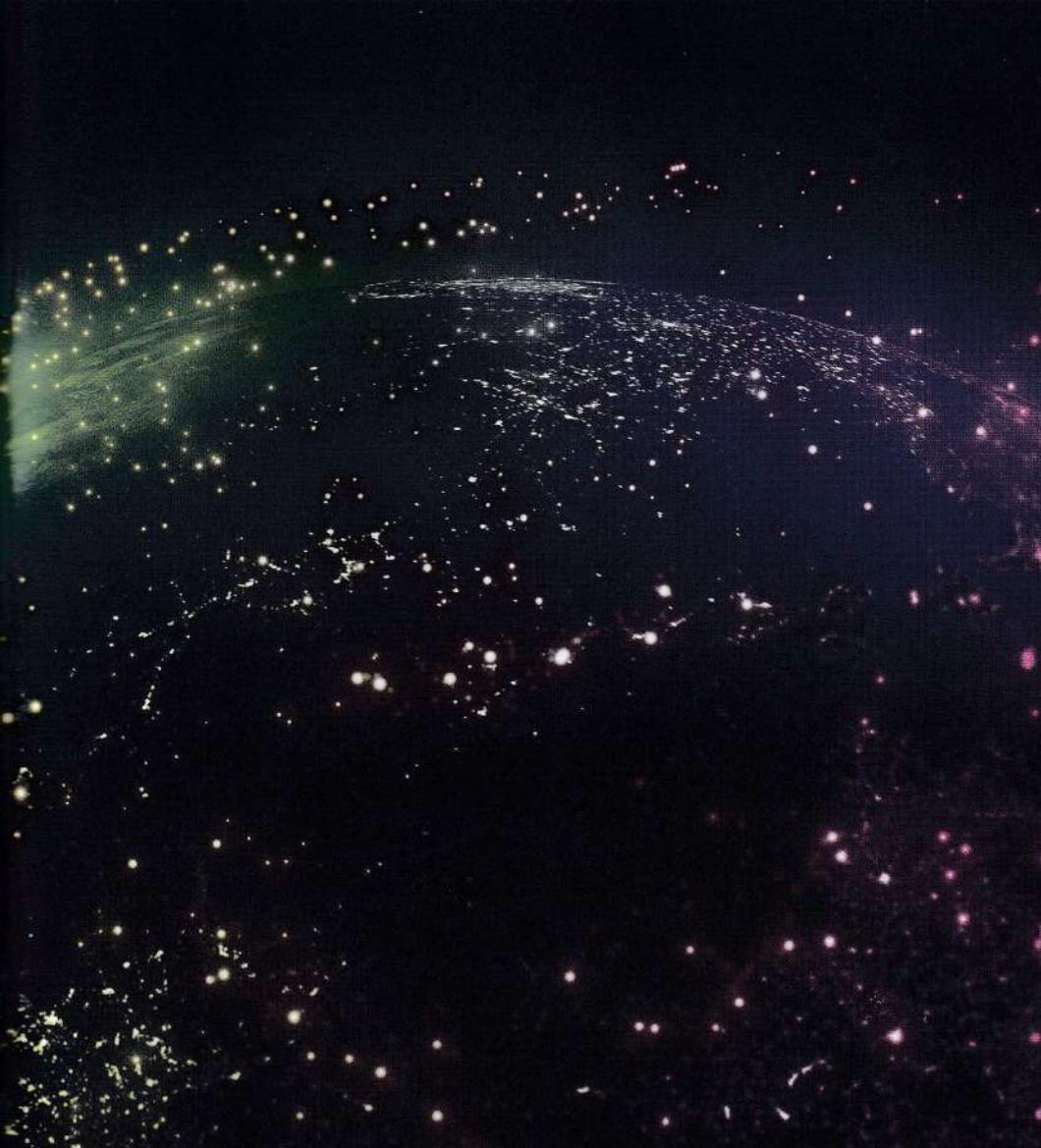


11

NOVEMBER  
2021

OISCA NEWS  
情報交差点



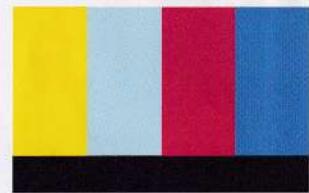


## What's OISCA

オイスカ・インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立され、現在36の国と地域に組織を持つ国際協力NGOです。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では農林業体験やセミナー開催などを通じて啓発活動を積極的に進めています。

### OISCAの標章



オイスカの世界観がこの標章に象徴的に表されています。天(青)、火(赤)、水(水色)、地(黄)、それにこの4要素を調和的に活動させ、人類万物のいのちを生成発展させる源である「宇宙」を表す黒です。



鼎談メンバー

渡辺  
利夫  
中野  
悦子  
荒木  
光弥

オイスカ会長  
オイスカ理事長  
国際開発ジャーナル編集主幹

2000年代、ODA改革の長い道のりを共に歩んだ渡辺会長（左）と荒木主幹の付き合いは20代の頃までさかのぼるという

※今回の鼎談は「国際開発ジャーナル」11月号との連動企画として実施しました

### OISCAという名称の意味

O rganization 機構  
I ndustrial 産業  
S piritual 精神  
C ultural 文化  
A dvancement 促進

人間の生存に不可欠な三要素“産業・精神・文化”的バランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。

### 今月の表紙写真

Photo by Yukihiko Ishibashi

1992年の「子供の森」計画の一コマ。木を植えている子どもたちも、今は立派なお父さん、お母さんになっていることでしょう。育った森が地域の財産となり、未来へと引き継がれていきますように。(フィリピン・サガイ市)



特集

オイスカ創立60周年記念鼎談

# 地球規模の思想をつくる

オイスカが60年にわたって取り組んできた国際協力活動は多岐にわたる。

創立時から時代が流れ、世界情勢が大きく変化する中、これまでの活動を

振り返ると同時に、未来がよりよいものであるために、オイスカが果たすべき役割、進むべき道とはどのようなものなのかを考える。

**中野** 今日はオイスカの創立60周年を振り返り、これから

のオイスカの歩むべき道についてお話をできたらと思って

います。日本で唯一の国際協力専門誌の編集に長く携わりながら日本の国際協力をけん引してこられ、オイスカのことも長年見ていてきた

荒木さんに進行役をお願いしまして、渡辺会長にもご参加いただき、いろいろとお話をうかがいたいと思います。

よろしくお願ひします。

**荒木** 渡辺先生と僕との付き合いは長くなりますね。個人的なことは別として、国際開発ジャーナル誌（以下、ジャーナル）の創刊の時ですから、1967年ですね。その頃渡辺先生はまだ慶應義塾大学の大学生でしたか？

**渡辺** ええ、別の大学で3年くらい給料をもらしながら大学に通っていた頃です。

**荒木** うらやましいな（笑）。

まだパリパリの「青年渡辺」の頃に、ジャーナル創刊2号に執筆いただきましたね。

**渡辺** ハリー・ジョンソン<sup>\*1</sup>『南北問題の経済学』。こんな厚い英語の本を論評しました。

\*1・ハリー・ジョンソン  
カナダの経済学者。アメリカを拠点にイギリスやスイスでも活躍。1976年アメリカ経済学会の副会長に就任。主な著作に「南北問題の経済学」などがある。

\*2・大来武郎  
外交官、国際派のエコノミストとして活躍。退官後、日本経済研究センター理事長や海外経済協力基金の總裁を務め、外務大臣に就任。

**中野** 今日はオイスカの創立60周年を振り返り、これから

のオイスカの歩むべき道についてお話をできたらと思って

います。日本で唯一の国際協力専門誌の編集に長く携わりながら日本の国際協力をけん引してこられ、オイスカのことも長年見ていてきた

荒木さんに進行役をお願いしまして、渡辺会長にもご参加いただき、いろいろとお話をうかがいたいと思います。

よろしくお願ひします。

**渡辺** 本の中では著者は、ODAは供与国の方が儲けているという方向に話を持っていて、だから供与国よ、あまり威張るなど主張していました。今だったら取り上げないです。が、当時は私も若かったんですよ。

**荒木** 私自身も、若かった頃のオイスカとの関係を振り返つてみると、間違いなく大来佐武郎先生に行きつきます。

**荒木** そう。ハリー・ジョンソンの低開発国経済政策に関する見解。実に新鮮でした。その後の68年2月25日の号では「ひも付き援助の問題」を取り上げてもらいました。こちらはパキスタンの研究者が書いた本でしたが、当時、大変話題になりました。

**渡辺** アメリカのパキスタン援助に関する内容でしたね。ひも付きだつたから、本が出た途端に政府も目を丸くして（笑）。

**荒木** その時は円借款も全部ひも付きだつたから、本が出た途端に政府も目を丸くして（笑）。

**渡辺** 本の中では著者は、ODAは供与国の方が儲けているという方向に話を持っていて、だから供与国よ、あまり威張るなど主張していました。今だったら取り上げないです。が、当時は私も若かったんですよ。

**荒木** 私自身も、若かった頃のオイスカとの関係を振り返つてみると、間違いなく大来佐武郎先生に行きつきます。

**荒木** そう。ハリー・ジョンソンの低開発国経済政策に関する見解。実に新鮮でした。その後の68年2月25日の号では「ひも付き援助の問題」を取り上げてもらいました。こちらはパキスタンの研究者が書いた本でしたが、当時、大変話題になりました。

**渡辺** アメリカのパキスタン援助に関する内容でしたね。ひも付きだつたから、本が出た途端に政府も目を丸くして（笑）。

**荒木** その時は円借款も全部ひも付きだつたから、本が出た途端に政府も目を丸くして（笑）。

**渡辺** 本の中では著者は、ODAは供与国の方が儲けているという方向に話を持っていて、だから供与国よ、あまり威張るなど主張していました。今だったら取り上げないです。が、当時は私も若かったんですよ。

**荒木** 私自身も、若かった頃のオイスカとの関係を振り返つてみると、間違いなく大来佐武郎先生に行きつきます。



オイスカの会合に参加した若き日の荒木氏(左)

「荒木君、オイスカって知つて  
いるか」と聞かれて、「いや知  
りません」と。それで、オイ  
スカを紹介されて、「応援して  
あげてくれ」と言われました。  
大来先生はあの頃、オイスカ  
の理事をされていたんですか。  
**中野** 日本総局の会長です。  
もともと、オイスカ・インタ  
ーナショナルの国内組織とし  
て、日本総局というのがあり  
ましたが、今は公益財団法人  
と一緒になっています。

僕にも「応援しろ」と言われ  
たんですね。僕は忙しくて理  
事会などには出られないでの、  
なかなかお手伝いできずについ  
ましたが、大来先生が77年夏  
に参議院全国区で出馬した時  
に事務局長を拝命しまして…  
…。その時にオイスカからも  
手伝いに来てくれて、そこか  
らですね、僕とオイスカとの  
組織的な関係ができたのは。  
**渡辺** 私はその時は関東学院  
大学にいましたが、学生も動  
員して、大来先生の選挙運動

章を書くコツを聞いたりして  
渡辺先生は、「経済学者やめて  
作家になつたら?」って言いつ  
たくなるぐらい美文を書くよ  
うになつちやつたんだよ(笑)。  
私がオイスカ・インターな  
シヨナル前総裁の中野良子さ  
んに初めてお会いしたのは、  
70年前後でした。』

オイスカを  
国際的に応援する

C Aは政府の機関だから、自分たちは海外に赴任してもだいたい任期が2年と決まって

いて、じつくり現地に関わることでできない。かたやオイスクは、家族ぐるみで赴任して、何年でもいられる。オイスカが現場密着型ができるところがうらやましかったのもあるんじゃないかなあ。

**中野** 79年に私どもの月刊誌上で行つた座談会に大来先生

もご参加くださつていて、その際に「地道であるが、よくここまでやつてきたと感心している。できる限り協力を

渡辺 まだ中野さんの若い頃

**荒木** うん、そう。でも怖かつた。じつとしていて穏やかなのに、貫禄とは違う銃さがくあった。政治家や官僚とも全く別のタイプでしたね。自分の信念や思想を持つた人っていうのは、こういう態度と顔つきをするものなのだと思います。

習慣の中に飛び込み、密着しながら推進してきたということに敬服している」とコメントしてくださいました。大来先生ご自身が感じていたオイスクを、政府内に広めようとしたくてくださいました。大来奔走してくださっていたんですね。

**荒木** 大来先生のそうした協力もあり、私も自分のネットワークを活用して、OTCAや外務省の中でのオイスカを正しく理解してもらおうと努力徐々にそれが広がっていって政府の中での認知度も上がり、ちゃんととした評価が得られるようになつていつたと思います。

**渡辺** オイスカの実績も上がつてきていましたからね。後でもお話しする「第2次ODA改革懇談会」で、国民参加というキーワードが出てきますが、その目に見える主体ですが、その目に見える主体がNGOだったわけです。日本政府が進める国際協力の的な世界にNGOが顔を出したのは、それが最初でしたよね。

**荒木** そうですね。NGOのODAへの参画が公式化したのは、渡辺先生が2001年

渡辺 オイスカの実績も上がり、徐々にそれが広がつていって、政府の中での認知度も上がり、ちゃんととした評価が得られるようになつていつたと思います。

ようになつていつたと思いま  
す。

つてきていましたからね。後でもお話しする「第2次ODA改革懇談会」で、国民参加というキーワードが出てきますが、その目に見える主体がNGOだったわけです。日本政府が進める国際協力の公的な世界にNGOが顔を出したのは、それが最初でしたよね。

から外務省の「第2次ODA改革懇談会」の座長になつてからです。そのようにしてオイスカをはじめとする民間の団体の存在が高まつて、たという流れがあるよね。先ほどの「第2次ODA改革懇談会」では2000年代のほぼ10年間、渡辺先生が座長として、私はメンバーとしてODA改革に関わつてきました。当時、外務省では不祥事が発覚して、世の中から叩かれていた。名誉挽回のためには社会的に価値ある仕事

をしなければという思いがあつたんでしようね。それを渡辺先生は、拓殖大学の国際開発学部の学部長の時代から学長までの間、関わつていました。ずっと座長ですよ。これも歴史に残すべきことじやないかと思いますね。

**渡辺** いやいや、荒木さんに神輿は軽いほうがいいって言いますしね(笑)。

**荒木** ところで、その頃、オイスカはどんな活動をしていましたか。→

## 「子供の森」計画を世界レベルのプログラムへ

**中野** 2000年頃は、もう

「子供の森」計画(以下、CFP)を始めて10年が経過して軌道に乗つてきている頃ですから、植林をはじめとする環境問題に注力していた時期でしょうか。1980年代から「苗木一本の国際協力」というスローガンを掲げて、海外の緑化活動のための募金を日本国内でスタートさせ、日本からボランティアを派遣して、

現地の人たちと一緒に森づくりを進めていました。しかし

ながら、現地の人たちの植林に対する理解がなかなか深まらず、環境教育の重要性を実感しており、それで1991年にCFPを始めました。これは、急がば回れということです、子どもたちの教育現場での緑化の意識を育んでいくこうという活動です。オイスカ創立



上／地球サミット賞授賞式(1993年7月)  
下／コロナ禍でもCFP参加校の子どもたちが「グリーンウェイブ」の一環で植林を実施

30周年のタイミングで発表しました。CFPがスタートすると、企業や労働組合などの各種団体の皆さんからの支援や参加が増えましたね。資金だけではなく、顔の見え支え、実際に体を動かして汗を流す支援をしたいということで、海外の現場にボランティアを派遣できなかというニーズが高まつていていた時期でもあり、CFPはそれに応えることができるプログラムでした。現地の子どもたちも、日本人の人たちがわざわざお金を持って自分の学校に植林に来るわけですから、「木を植えるつて、そんなに大切なことなんだ」と感覚的に理解しますし、日本人と一緒に植えた木を自分が責任をもつてお世話をしたいという気持ちも芽生えますから、双方にとつてよかったです。2000年代は、そうした活動の延長にあり、企業の社会的責任の重要性が叫ばれるようになるにつれ、CSR活動として社会貢献を一緒にできないか、という声が高まつてきました。それでも、海外の現場でも、コミュニティの中である学校でCFPに取り

**中野** 91年にフィリピンでスタートして、今では37カ国に広がっています。オイスカには、長年育ててきた人材が各國にいるからこそできたことです。彼らが自分たちのふる

組むことで、結果的に地域全体の森づくりや環境に対する意識の向上につながり、その活動がコミュニケーションレストづくりとして、地域にも広がり始めた頃でしたね。

**荒木** CFPは世界的にも価値のある、国連が取り上げるべき取り組みだと思うんですよ。

組むことで、結果的に地域全体の森づくりや環境に対する意識の向上につながり、その活動がコミュニケーションレストづくりとして、地域にも広がりをつくることができました。そうした取り組みが認められ、93年には国連の地球サミット賞も受賞しています。国連との関わりでいうと、2010年に生物多様性条約事務局と基本協約を結び、青少年への、環境や生物多様性の保全の取り組みへの参画を促す働きかけを協働で行つきました。その中の一つ、毎年5月22日の「生物多様性の日」の前後に行われるグリーンウ

エイブ活動も、CFPが中心となつて実施しています。

**荒木**

CFPのような日本発の世界的なプログラムになり得るアイデアは、大来佐武郎先生みたいな人がいたら国連に働きかけているでしょうね。今の日本にはそういう方がいらっしゃらないのが残念です。60周年を契機に、これを国際化して世界レベルのプログラムに押し上げていくことを考えたいと思います。』

## 空腹である限り人類の幸福も平和も確立されない

ODAの時代になる」という議論になりました。考えてみたら、オイスカはこれをやっているわけです。この本は日経新聞の論説委員をされている小林省太さんが書かれたヒューマンドキュメントで、プロジェクトに関わったオイスカのスタッフや地元の人たち、研究者らの話などをもとにまとめられています。必要な人材は被災地の住民の雇用で賄う。50万本のクロマツを育て、仙台空港のすぐそばにある名

取市の海岸100haに植え、10年かけて海岸林を再生させようというものです。そのための費用は10億円かかるんですけど、これは民間からの寄附金でやろうというベンチャープロジェクトですよ、国内版ODA。本来これだけの規模の復興であれば、当然政府

が手がけるべき事業なのです。が、政府はオイスカに任せた。オイスカの実績、豊かな経験を見込んでのことなのでしょうけれど、日本政府にもそれ

国際化の議論も大事ですが、私は今、ODAの国内版が課題だと考えています。

**渡辺**

ここに『松がつなぐあした』という本がありますが、これは、オイスカが東日本大震災の直後から宮城県名取市で取り組んできた長期復興支援の記録です。私もの大震災の後、あれだけの惨劇を受けて、大学でも教員が集まって話し合いをしましたが、「この震災から復興までの間は国内へ

だけの度量があるということが少し驚きではありました。オイスカは震災直後から動き出しました。10年の計画を立て、協力を呼びかけると、先ほど中野理事長の話にありましたけど、企業の社会的責任

CSRとして、何か人様のお役に立ちないとスローガンを掲げる企業がプロジェクトのためにお金も出し、ボランティアグループを派遣する。大手の企業もこの一大ベンチャーに加わった。CSRを担う人材を育てるといった効果があつたのだと思います。かつてODAには「顔の見える支援」が求められていましたが、100haもの規模の再生された海岸林がはつきり目に見える形になつていて、その顔の見える活動です。

大手の企業もこの一大ベンチャーに加わった。CSRを担う人材を育てるといった効果があつたのだと思います。かつてODAには「顔の見える支援」が求められていましたが、100haもの規模の再生された海岸林がはつきり目に見える形になつていて、その顔の見える活動です。

**荒木** 60年代から80年代にかけて、オイスカがアジア太平洋の開発途上国で積み上げてきた経験値というのは、日本各地で活かされている気がします。だから、この仕事は一

方通行ではなくて、双方向に行つたり来たりで動いている社会運動みたいなもの。国際協力にはそういう価値があるのではないかというのが、最近の僕の見解です。

**渡辺** 社会運動だという表現はよくわかります。

政府はNGOに対して、自分たちが好きで海外に行つて活動をしているというような見方をしてきた。だから、日本の国際協力の考え方の中にあっては、NGOが活躍できる土壤

どうしようもない格差が可視化されてしまいました。今後、本格的なエネルギーを注いでいくべきは国内じゃありません。もちろん、アジアへの支援は続けない



「海岸林再生プロジェクト」では、被災地住民で組織されたグループが50万本のクロマツの苗を育てています。



研修農場でインド人の青年に技術指導をする開発団員（左）

日本だってまだ未成熟な時代ですよ。行つた先がさらにびっくりするほど未成熟なところだから、現地での苦労は相当なものだつたでしょうね。

**中野** 好きで行つたと言われればそれまでですが……創立者は常常、「人間は空腹である限り精神的な考え方を受け入れられるものではない。まずは飢餓と貧困をなくさなくては本当の意味での人類の幸福も平和も確立されない」と人々に訴えかけていました。60年前にオイスカが誕生した頃のアジアは、どの国も食糧難に見舞われていました。オイスカが誕生するきっかけとなつた国際会議に出席していたインドの国会議員は、「このままだとインドでは相当の餓死

が、派遣する方も大変だったと思います。でも、そうやってだんだんと東南アジアの成熟を図つていく中で、オイスカがたどりついたのは、将来のアジアの発展のために尽くす人の育成をしなければならないということだった。それはJICAでも政府でもやつてゐるけれど、オイスカはもつと泥臭く、地べたに這いつばつしていく人材に行きつくわけですね。それって、ODAの枠組みの中では一番苦手とするところだと思うんです。だから、アジアの地方の底上げのために汗をかく人材を現地で地道に育てるという、ODAの手の届かないところを民間のオイスカがやつ正在つていうのは、一種の分業のようのですよね。

「日本のODAに求められているのは国民の潜在的な意欲や能力を積極的に引き出し、これを開花させるための具体的な取り組みである。開発途上国に向けられたODAは、その本質からして民間のOISCAがやつてきている。」

ODAのパートナーとしてのNGOの重要性が高まっている。NGOとの役割分担をより明確なものにする必要がある。今後はODA政策の実施面だけでなく、策定過程および評価面においても、開発途上国のきめ細やかな情報を使つたことでNGOが公的に向上できたのも事実です。僕が書いた最終報告書の第1章の冒頭部分はこうです。

「日本のODAに求められているのは国民の潜在的な意欲や能力を積極的に引き出し、これを開花させるための具体的な取り組みである。開発途上国に向けられたODAは、その本質からして民間のOISCAがやつてきている。」

上國に向かう日本人の心、活力をいかにODAに反映させらるかが焦点である」

第1章のタイトルは「国民参加」で、第3章が「NGOとの連携」です。ODA改革に関する最終報告書、つまり外務省のトップレベルのNGOについてこのように書かれては初めてのことです。

「ODAのパートナーとしてのNGOの役割分担をより明確なものにする必要がある。今後はODA政策の実施面だけでなく、策定過程および評価面においても、開発途上国のきめ細やかな情報を使つたことでNGOが公的に向上できたのも事実です。僕が書いた最終報告書の第1章の冒頭部分はこうです。

互に切磋琢磨すべきである。政府によるNGO支援を強化するとともに、NGOに対しても、体制、能力の強化、適格性、透明性の確保のために一層の

日本だってまだ未成熟な時代ですよ。行つた先がさらにびっくりするほど未成熟なところだから、現地での苦労は相当なものだつたでしょうね。

それにも農業技術を教えて食べてしまえばなくなる。それよりも農業技術を教えて食糧増産の道を」と呼びかけて、全国から篤農家を募つて農業開発団としてインドに派遣したのが始まりでした。

## アジアにとつても絶対に重要

主体的な努力を求める

僕が盛り込みたかったのは、政府とNGOとが対等だとう考へ方でした。しかしNGOは予算面を含め、厳しさを抱えているから、体制の強化や予算面で協力すべきだとう二つの精神をここには書きました。そして次のように結びました。

「日本人は新しい生き方を模索している。青年海外協力隊への若者たちの積極的な参加がその一例である。派遣の2年間に人生の価値を見出したいと考えている若者が多い。貧しい国々の開発事業に新しい生きがいを求めるシニアな人材も少なくない。我が国のNGOもそうした新しい状況のなかで育ってきた。地方自治体や企業、大学にもODA活動への参加の意欲が生まれている。国民参加は単なるキヤツチフレーズではない。新しい時代状況から生まれた国民の声である。ODA活動への国民参加は、閉塞感漂う日本社会に新しいエネルギーを与え、日本人としての誇りを大きく芽生させるにちがいない」

な文章があるのはめずらしいのですが、私は国民参加、特にNGOの参加が必要だと発信したかった。この後も荒木さんが中心になつてPPP(Public Private Partnership)つまり官民連携論を打ち出して、NGO論、CSR論も含め、国民諸階層のすべてを取り込むODAというイメージができ上りました。それらを結集したものが国益につながるんだという方向に持つていけるように二人で考えたんだよね。ただ、なかなか世の中そういういかなかつたですね。

**中野** ODAは、税金を使っているのに、なぜ国益という言葉を出してはいけないのかが理解できません。

**荒木** 当時の日本社会には、賠償問題も含めた戦前・戦後の状況や、それをひつくるめたイデオロギーの分裂状態がありました。相手の国づくりにすべてを捧げる」といった純粹な開発哲学が登場し、国際益を中心時代が長く続きましたが、「アジアの人たちと仲良くして、日本を理解してもうことがいかに日本にとつて重要か」がだんだんと分かってくるんです。国益に通ず

る問題提起をずっとしてきた中で聞いた話ですが、マレーシアのマハティールさんが「国益のことと言及しない政治家なんて我々は信用しない。日本は國益を口にする政治家はアジアにとつても絶対に重要なんだ」と、ある政治家に言ったそうです。僕は感心して、それ以来国益を前に出して発言するようになりました。

**渡辺** 1990年代、日本は世界一のODA大国だったのに、ODAの理念なんて誰も語らなかつた。突出した規模のODAを払いながらそこに理念がないなんて、そんな馬鹿なと思いましたよね(笑)。

東西冷戦時代、日本はアメリカの立場に立つていましたから、日本独自のODAの理念

なんて立てようもなかつたん

ればODA理念というのは、日本が国としてなすべきこと

が語られるべきですが、逆に「軍事的用途および国際紛争の手段として使つてはならぬ」ということを前面に出しました。何をするべきか、じやなくて「何をすべきじゃないか」ばかりではおかしい、とか

**荒木** 逆ですよね。それが第二次ODA改革懇談会につながるんです。

**渡辺** そうです。いろんな議論が噴出するんだ

けど、まとまらないでいました。もう一回本格的な議論を、ということ

で第二次ODA改革懇談会が始まつた。そこで先ほど

言つた「国民参加」という言葉を使つてさまざまな層を

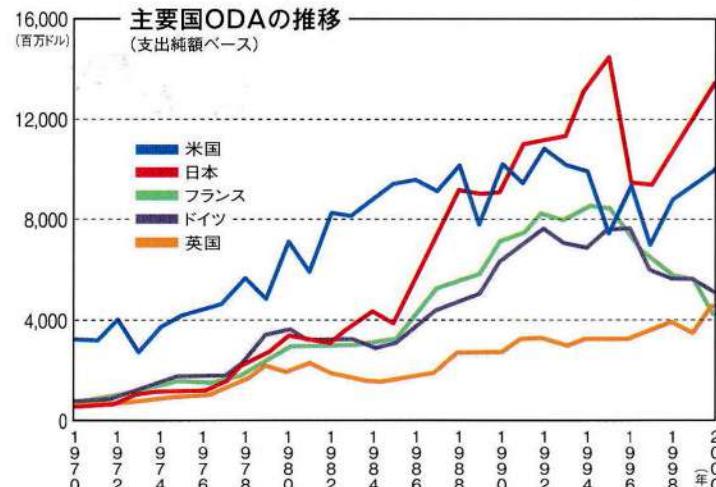
含むことにより、最終的に国民的な理解を経て「国益」という言葉につなげていこうと考えました。成文化さ

れるまでには時間かかりましたよね。

**中野** 日米同盟の体制は同じなのに、国民の考え方があわ

ることで、政策も変わるものなのでしょうか。それにして

も、日本は国連への拠出金も大きかったのに、何も口出し



論が噴出するんだ

けど、まとまらないでいました。もう一回本格的な議

論を、ということ

で第二次ODA改革懇談会が始まつた。そこで先ほど

言つた「国民参加」という言葉を使つてさまざまな層を

含むことにより、最終的に国民的な理解を経て「国益」という言葉につなげていこうと考えました。成文化さ

れるまでには時間かかりましたよね。

**中野** でも最後、2009年の「国際協力に関する有識者

会議」の時は、「国益」という言葉を自然体で使つている。

マスコミも叩かなくなつたし、表立つて国益論が出せるようになつた。国民も分かつてき

たんでしようね。

**荒木** 逆ですよね。それが第二次ODA改革懇談会につながるんです。

**渡辺** そうです。いろんな議論が沸き起つた。それがODA大綱につながったんです。

**中野** 日米同盟の体制は同じなのに、国民の考え方があわ

ることで、政策も変わるものなのでしょうか。それにして

も、日本は国連への拠出金も大きかったのに、何も口出し

していなかつたですよね。

**荒木** 国連だけでなく、典型的なのはアジア開発銀行(ADB)を作る時の拠出金です。

アメリカは口だけ出してお金は出さない。日本は一事が万

事、アメリカの政策に沿う形にしていました。日本は軍

事力は出さないけれど、率先してお金を出すという、出し

方の違いはありましたよ。恐らく、そうすることで、平和

憲法を守つたのでしよう。アジアへの支援をするのが大前

提だけど、日米関係、アジアとの関係においても、表立つて「国益」というと反論され

て実行できなくなるから、まずは言葉の上で「国際益」とい

いながら「国益」を追求するという、二律背反的な苦労

を抱えて国際協力を進めてきたというのが実情だとと思う

です。だから簡単ではなかつたけど、そういう意味での大きな国益を、ODAを通して

守ってきた。最終的には、国益論が当たり前で、それ以外にはないというラインに立つことができた。

ここまでくるのには時







タイ北部で進められた日本NGO連携無償資金協力によるプロジェクトでは、20年以上前にCFPがスタートし、植林意識が根付いていた村で、生計向上のために森を有効活用する取り組みが行われた。現在は他県からの視察も受け入れている

荒木 昨年、CFPの37カ国目、アフガニスタンで新たに活動が始まりました。オイスカは現地に拠点がありませんが、現地のカウンターパートのNGOが取り組んでくれています。つい最近の陥落で心

よく星とか宇宙の話をしていたけど、その時は「え?」と思っていた。けれども、今となってみるとまさに正解なの。目の前の個々の問題が、地球規模で考えなければいけないレベルに来ているでしょう。今なら、宇宙から地球を見たらどうかと考える次元に来ている。さつきは国益の話を

荒木 どこの国にとっても子どもは大事だし、森っていうのは象徴的な言い方で、実際には環境のことだから、もうこのやり方しかないと思うけど、それを30年前から具現化して活動しているつてす

荒木 長く付き合って見てきた人間じゃないと分からぬかもしれないけど、僕は大先生に言われてずっとオイスカを見てきたつもりで、本質的なことを言うと、オイスカ

展を目指す、大きなプロジェクトの候補地となり得る事例が多く出てきています。

**荒木** CFPは、世界的なレベルで誰からも賛同を得られる根っこを持っているログラムですから、これを世界規模で広げていくことこそ「目に見えない国益」につながりますよ！

**中野** 昨年、CFPの37カ国目、アフガニスタンで新たに活動が始まりました。オイスカは現地に拠点がありませんが、現地のカウンターパートのNGOが取り組んでくれています。つい最近の陥落で心

大切。未来創造性の高い、日本の誇りとなる仕事にするためにも、もっと広げていきましょうよ。実をいうと、30年前はここまで意義を僕は理解できていなかつた。オイスカ全体もそう。先代の総裁は

中野 早すぎましたね。でも創立者は、そういう思いをオイスカに託したことだと思います。それから、私もCFPは地球の未来を子どもたちに託す大事な活動だと思っているので、荒木さんにそう言われて、今日はとてもうれしく思いました。

中野 ごいことだと思うよ。こういふことをやろうと発想するつて、ただのインスピレーションじゃない。哲学を持つてなければできないこと。

**渡辺** スピリチュアルな感じあるけど、これからは恐らくコロナとも共生していくかざるを得ない。今はステイホームで、オフィスにも行かずに入る時代で、スピリチュアルなものに人間の心が向いていく時代になると思うの。オイスカの創立者が訴えてきた、地球的哲学が人々の心にストレートに響く時代が来るかもしれませんよね。

**中野** 今日は懐かしい大先生の話をおうかがいできましたし、日本のODAを通じた国際貢献に大きな貢献をされたお二方から、オイスカのやつてきたお二方から、オイスカのやつてきましたことが日本の国益にも通ずることだと明言いたとき、うれしく思います。渡辺会長が言われる通り、目に見えない部分のこれまでの成果についても、しっかりと検証していく必要性を感じています。これから先も長くオイスカをサポートいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。

配していましたが、現地のカウンターパートからは実施については問題ないと連絡がきています。

**荒木** 万人に通じる思想だからです。木を植えるのも大事だけど、それが子どもの手で行われていることがもっと大事で、それを社会や地域が認めていくことがさら

総裁の話は、歳を取つてくると「すごいなあ」と思えるようになつて、オイスカの先見の明には、つくづくびっくりしているところです。今が、理解するドンピシャの時代なんだよね。だからオイスカは、ちょっとと早すぎちゃつた。

中野 うことをやろうと発想するつて、ただのインスピレーションじゃない。哲学を持つてなければできないこと。

**渡辺** スピリチュアルな感じあるけど、これからは恐らくコロナとも共生していくかざるを得ない。今はステイホームで、オフィスにも行かずに入る時代で、スピリチュアルなものに人間の心が向いていく時代になると思うの。オイスカの創立者が訴えてきた、地球的哲学が人々の心にストレートに響く時代が来るかもしれませんよね。

**中野** 今日は懐かしい大先生の話をおうかがいできましたし、日本のODAを通じた国際貢献に大きな貢献をされたお二方から、オイスカのやつてきましたことが日本の国益にも通ずることだと明言いたとき、うれしく思います。渡辺会長が言われる通り、目に見えない部分のこれまでの成果についても、しっかりと検証していく必要性を感じています。これから先も長くオイスカをサポートいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。



創立者のことば・中野典之助  
人は宇宙の縮図

荒木氏がオイスカに関わるようになった70年代、月刊「OISCA」に掲載されていた「創立者のことば」のタイトルのほとんどに「宇宙」という言葉が見られる（写真は1975年8月号）